40382
教科書文庫
4
760
3-1913
2000.0
19764

375.9
M014
資料室

尋常小學唱歌

第五學年用

文部省

375.9
M014

広島文教大学
資料室

尋常小學唱歌

第五學年用

文部省

廣島大學圖書

緒言

一　本書ハ本省内ニ設置セル小學校唱歌教科書編纂委員ヲシテ編纂セシメタルモノナリ。

二　本書ノ歌詞中尋常小學讀本所載以外ノモノニ就キテハ、修身・國語・歴史・地理・理科・實業等諸種ノ方面ニ渉リテ適當ナル題材ヲ求メ、文體用語等ハ成ルベク讀本ト歩調ヲ一ニセンコトヲ期セリ。

三　本書ノ曲譜ハ排列上其ノ程度ニ就キテ多少難易ノ順ヲ追ハザルモノナキニアラズ。是其ノ歌詞ノ性質上已ムヲ得ザルニ出デタルナリ。

四　卷頭ノ「みがかずば」「金剛石」「水は器」ノ三首ハ何レモ皇太后陛下ノ御歌ニシテ尋常小學修身書卷五ニ奉掲シタルモノナリ。「みがかずば」ノ曲ハ今回特ニ撰定シタルモノ、「金剛石」及ビ「水は器」ノ曲ハ學習院撰定ノモノニ係ル。

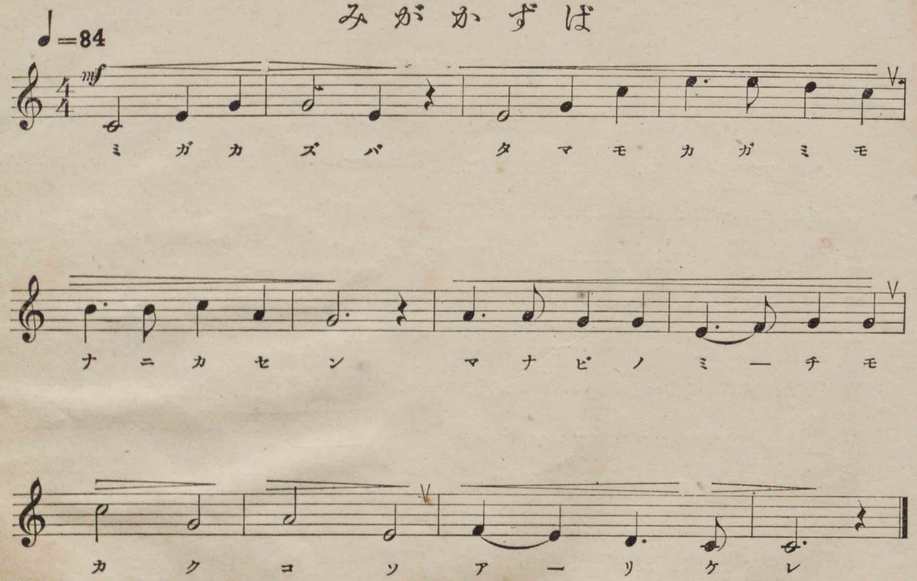
大正二年二月　　文部省

廣島大學教育 19764 圖書

目次

みがかずば……1
金剛石 水は器……3
一 八岐の大蛇……7
二 舞へや歌へや……11
三 鯉のぼり……15
四 運動會の歌……17
五 加藤清正……19
六 海……23
七 納涼……25
八 忍耐……27
九 鳥と花……29
一〇 菅公……31
一一 三才女……33
一二 日光山……37
一三 冬景色……39
一四 入營を送る……41
一五 水師營の會見……45
一六 齋藤實盛……49
一七 朝の歌……53
一八 大塔宮……55
一九 卒業生を送る歌……57

みがかずば



廣島大學圖書之印

みがかずば
みがかずば
玉もかがみも
なにかせん。
まなびの道も
かくこそありけれ。

金剛石　水は器

♩=92

mp
コンガウセキモミガカズバ
みーづはうつはにしたがひて

mf
タマノヒカリハソハザラム
そのさまざーまになりぬなり

p
ヒトモマナビテノチニコソ
ひとはまじはるともにより

f
マコトノトクハアラハルレ
よーきにあしきにうつるなり

f
トケイノハリノタエマナク
おのれにまさるよきともを

mp
メグルガゴトクトキノマノ
えーらびもとめてもろともに

mf
ヒカゲヲシミテハゲミナバ
ころのこーまにむちうちて

f
イカナルワザカナラザラム
まなびのみちにすすめかし

水　は　器

水はうつはにしたがひて、
　そのさまざまになりぬなり。
人はまじはる友により、
　よきにあしきにうつるなり。
おのれにまさるよき友を
　えらびもとめて、もろ共に
こころの駒にむちうちて、
　まなびの道にすすめかし。

金　剛　石

金剛石もみがかずば、
　珠のひかりはそはざらむ。
人もまなびて後にこそ、
　まことの徳はあらはるれ。
時計の針のたえまなく
　めぐるが如く、ときのまの
日かげをしみて勵みなば、
　如何なる業かならざらむ。

八岐の大蛇

♩=100

mf

一 メグラスカーキーネ　カドヤツツクリ
二 やまたのをーろーち　ちかづきたりと
三 ミコトハタ―チ―テ　イマコソトキトキ
四 としごとひ―と―を　きてとりくひし

mf

ソノカドゴ―ト―ニ　サジキシツラヘ
そのかどご―と―に　かしらさしいれ
ソノミハカ―シ―ノ　ツルギヒキヌキ
そのしこを―ろ―ち　こころにほろびて

f　　mp

サジキヒトツ―ニ　サカブネヒト―ツ
かしらひとつ―に　さかぶねひと―つ
ヒトツヒトツ―ニ　ヲカシラヤツ―ヲ
をよりいでた―る　みつるぎひと―つ

mp　　f

ソノフネソ―ネ―ニ　サケヲゾミテタル
さけのみの―み―て　ゑひてぞふしたる
キリスステマ―セ―バ　ナガルルチノカハ
わがすめろ―ぎ―の　たからとたふとし

一、八岐の大蛇

一、めぐらす垣根、門八つ造り、
　その門毎に桟敷しつらへ、
桟敷一つに酒槽一つ、
　その槽々に酒をぞ満てたる。

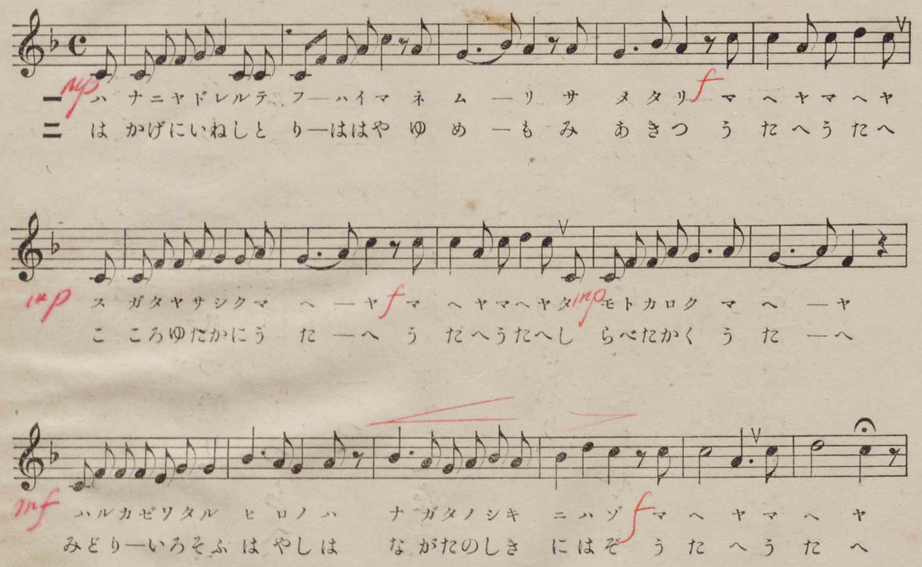
二、八岐の大蛇近づき來り、
　その門毎に頭さし入れ、
頭一つに酒槽一つ、
酒飲み飲みて醉ひてぞ臥したる。

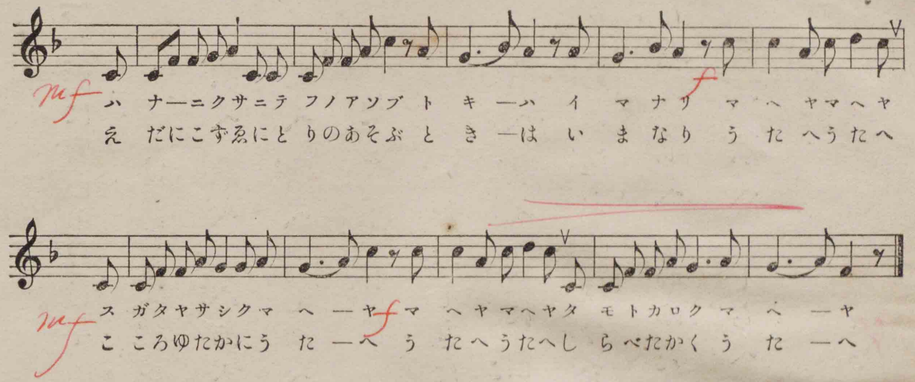
三、尊は立ちて、今こそ時と、
　その御佩の劒引抜き、
一つ一つに、尾頭八つを
　切棄てませば、流るゝ血の川。

四、年毎人を、來て取喫ひし、
　その醜大蛇こゝに滅びて、
尾より出でたる御劒一つ、
　我がすめろぎの寶とたふとし。

舞へや歌へや

♩=92


一 mp ハ ナニヤドレルテ フ―ハイマ ネ ム ―リ サ メタリ f マ ヘヤマヘヤ
二 は かげにいねしと り―ははや ゆ め ―も み あきつ う たへうたへ
mp ス ガタヤサシクマ ヘ ―ヤ f マ ヘヤマヘヤタ mp モトカロク マ ヘ ―ヤ
こ ころゆたかにう た ―へ う たへうたへし らべたかく う た ―へ
mf ハルカゼソタル ヒロノハ ナガタノシキ ニハゾ f マ ヘヤマ ヘ ヤ
みどり―いろそふ はやしは なかたのしき にはぞ う たへう た へ


mf ハ ナ―ニクサニテ フノアソブ ト キ ―ハ イ マナリ マ ヘヤマヘヤ
え だにこずゑにとりのあそぶ と き ―は い まなり う たへうたへ
mf ス ガタヤサシクマ ヘ ―ヤ f マ ヘヤマヘヤタ モトカロク マ ヘ ―ヤ
こ ころゆたかにう た ―へ う たへうたへし らべたかく う た ―へ

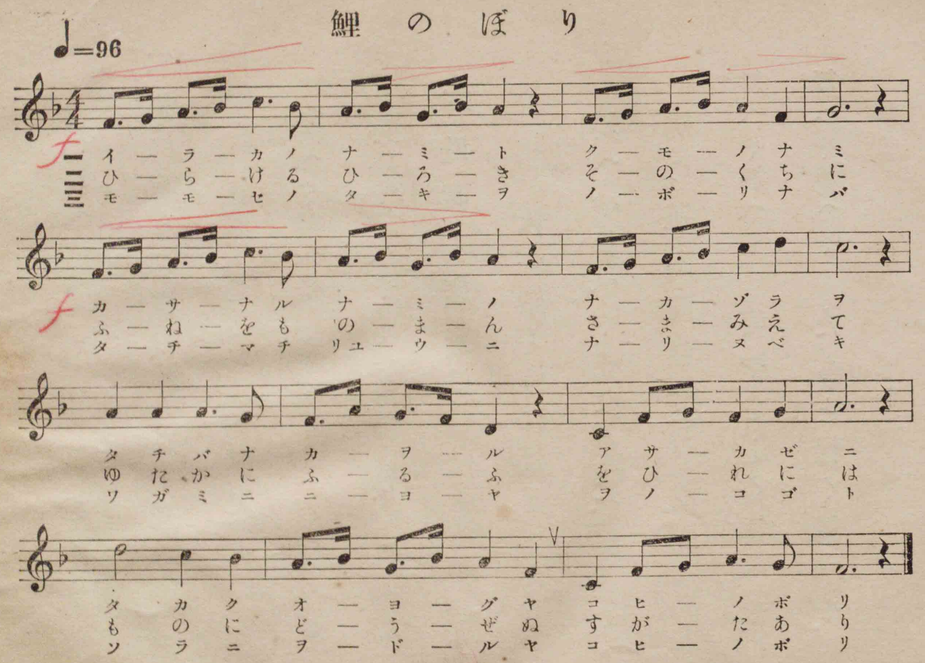
二、舞へや歌へや

一、花に宿れる蝶は今
　眠さめたり。
　舞へや舞へや　姿やさしく舞へや。
　舞へや舞へや　たもと輕く舞へや。
春風渡る廣野は
　汝が樂しきにはぞ。
　舞へや舞へや花に草に。
蝶の遊ぶ時は今なり。
　舞へや舞へや　姿やさしく舞へや。
　舞へや舞へや　たもと輕く舞へや。

二、葉蔭に寢ねし鳥は早
　ゆめも見あきつ。
　歌へ歌へ　心ゆたかに歌へ。
　歌へ歌へ　しらべ高く歌へ。
綠色そふ林は
　汝が樂しきにはぞ。
　歌へ歌へ枝に梢に。
鳥の遊ぶ時は今なり。
　歌へ歌へ　心ゆたかに歌へ。
　歌へ歌へ　しらべ高く歌へ。

（尋常小學讀本卷九所載）

鯉のぼり



三、鯉のぼり

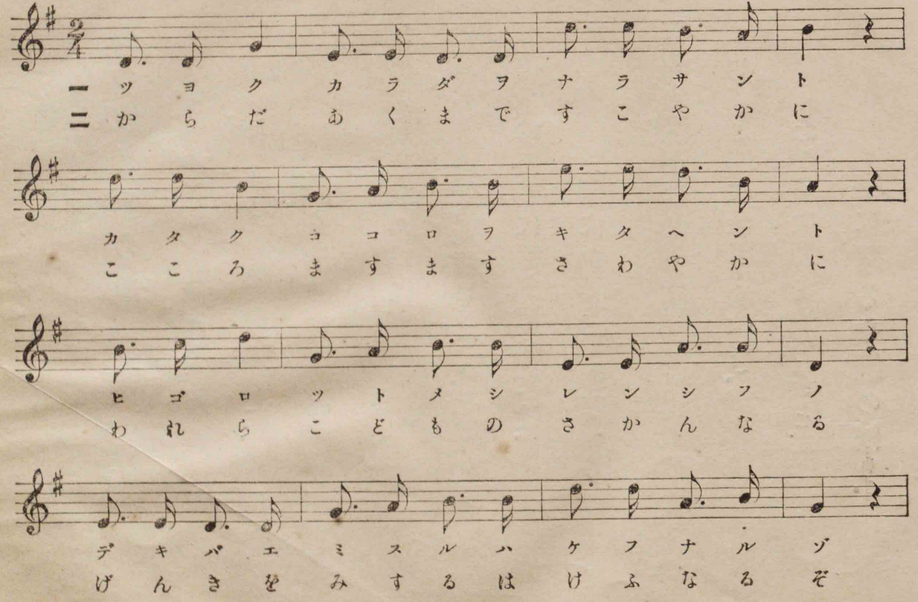
一、甍の波と雲の波、
　重なる波の中空を、
　　橘かをる朝風に、
　　高く泳ぐや、鯉のぼり。

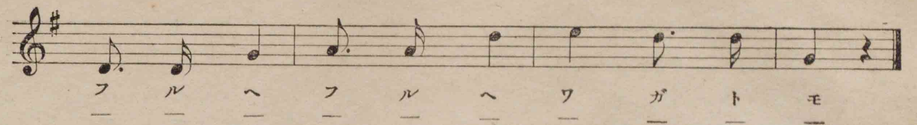
二、開ける廣き其の口に、
　舟をも呑まん様見えて、
　　ゆたかに振ふ尾鰭には、
　　物に動ぜぬ姿あり。

三、百瀬の瀧を登りなば、
　忽ち龍になりぬべき、
　　わが身に似よや男子と、
　　空に躍るや鯉のぼり。

運動會の歌

♩=88





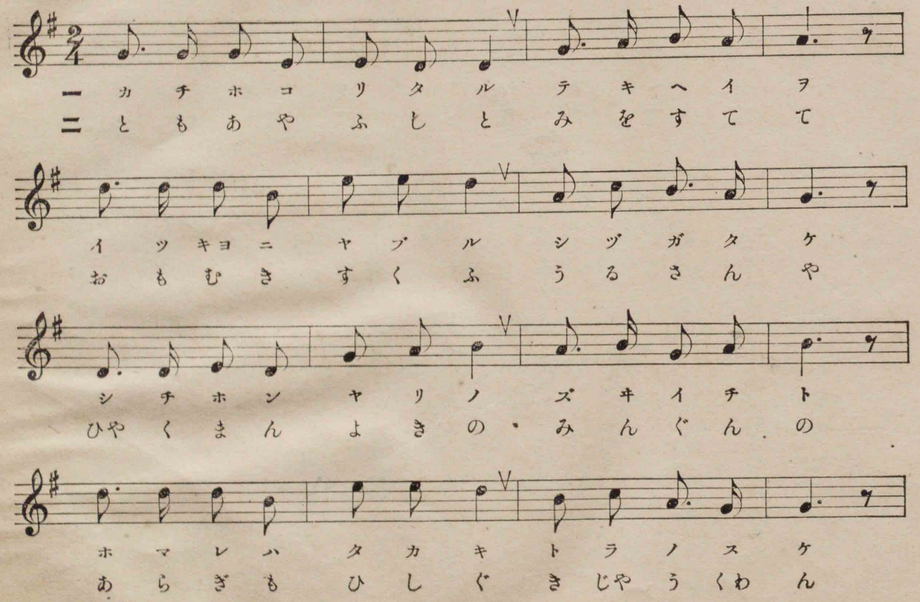
四、運動會の歌

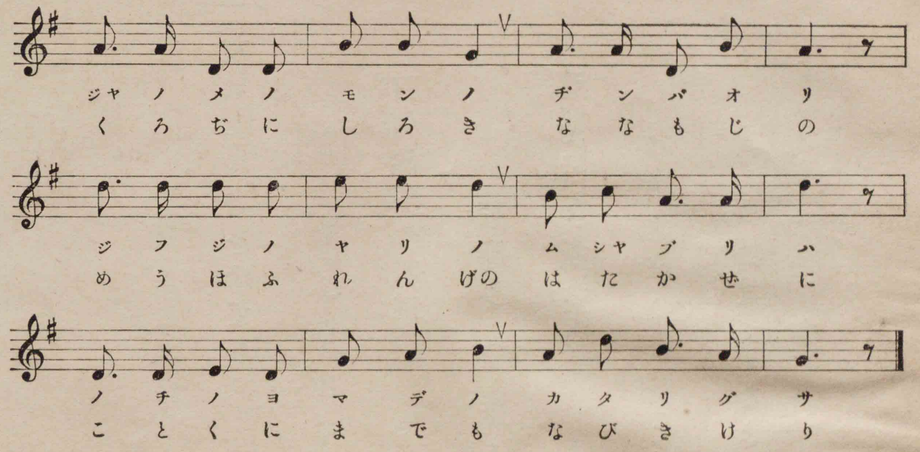
一、強く體を馴さんと、
堅くこゝろを鍛へんと、
日頃つとめし練習の
出來ばえ見するは今日なるぞ。
振へ、振へ、わが友。

二、からだあくまで健かに、
心ますゝ爽かに、
われら子どもの盛なる
元氣を見するは今日なるぞ。
振へ、振へ、わが友。

加藤清正

♩=72


一 カチホコリタルテキヘイヲ
二 ともあやふしとみをすてて
イツキヨニヤブルシヅガタケ
おもむきすくふうるさんや
シチホンヤリノズキイチト
ひやくまんよきの、みんぐんの
ホマレハタカキトラノスケ
あらぎもひしぐきじやうくわん


ジヤノメノモンノヂンバオリ
くろぢにしろきななもじの
ジフジノヤリノムシヤブリハ
めうはふれんげのはたかせに
ノチノヨマデノカタリグサ
ことくにまでもなびきけり

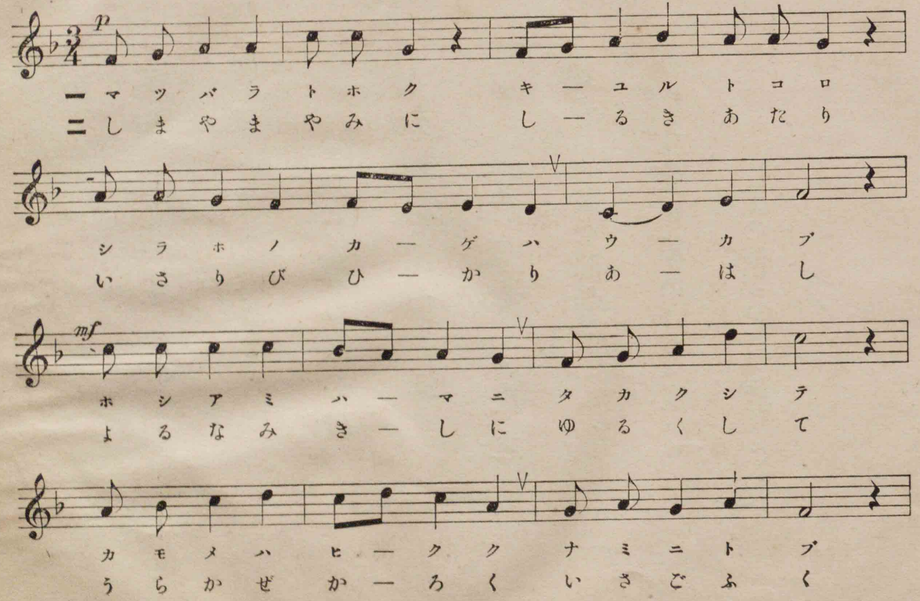
五、加藤清正

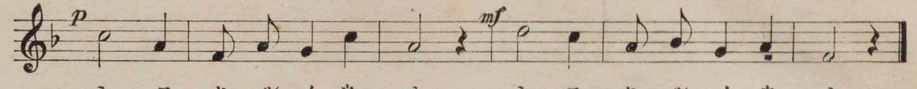
一、勝ちほこりたる敵兵を
　一擧に破る賤が嶽、
七本槍の隨一と
　譽は高き虎之助。
蛇の目の紋の陣羽織、
　十字の槍の武者振は
後の世までの語りぐさ。

二、友危しと、身をすてゝ、
　赴き救ふ蔚山や、
百萬餘騎の明軍の
　荒膽ひしぐ鬼上官。
黑地に白き七文字の
　妙法蓮華の旗風に、
異國までも靡きけり。

海

♩=84





六、海

一、松原遠く消ゆるところ、
白帆の影は浮ぶ。
干網濱に高くして、
鷗は低く波に飛ぶ。
見よ晝の海。
見よ晝の海。

二、島山闇に著きあたり、
漁火光淡し。
寄る波岸に緩くして、
浦風輕く沙吹く。
見よ夜の海。
見よ夜の海。

七、納涼

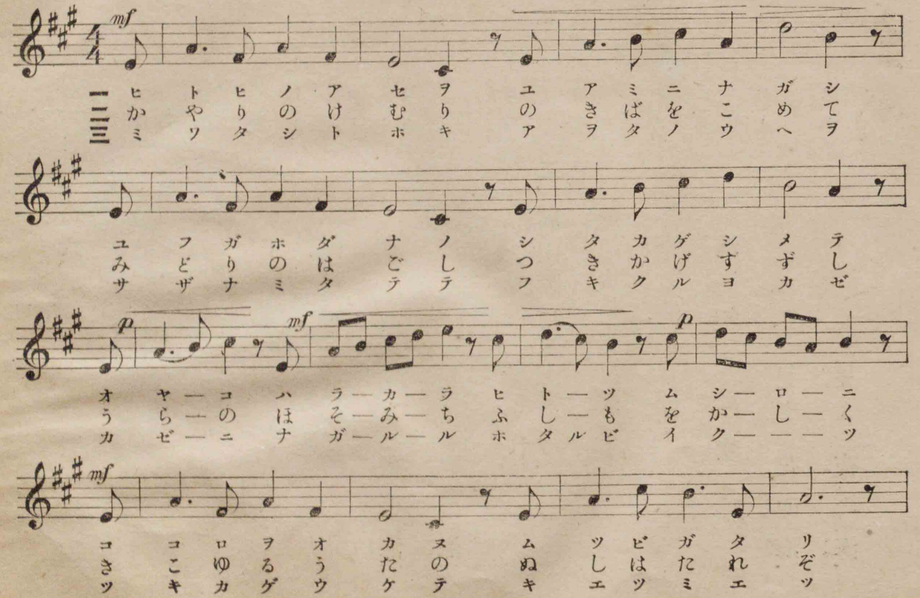
一、一日の汗を湯浴に流し、
夕顔棚の下蔭占めて、
親子同胞一つむしろに
心をおかぬむつび語り。
むつび語り樂しや。

二、蚊遣のけむり軒端をこめて、
緑の葉ごし月影すゞし。
裏の細路、節もをかしく
聞ゆる歌の主は誰ぞ。
主は誰ぞ、ゆかしや。

三、見わたし遠き青田の上を
細波たてて吹來る夜風。
風に流るゝ螢火いくつ、
月影うけて消えつ見えつ。
消えつ見えつ、涼しや。

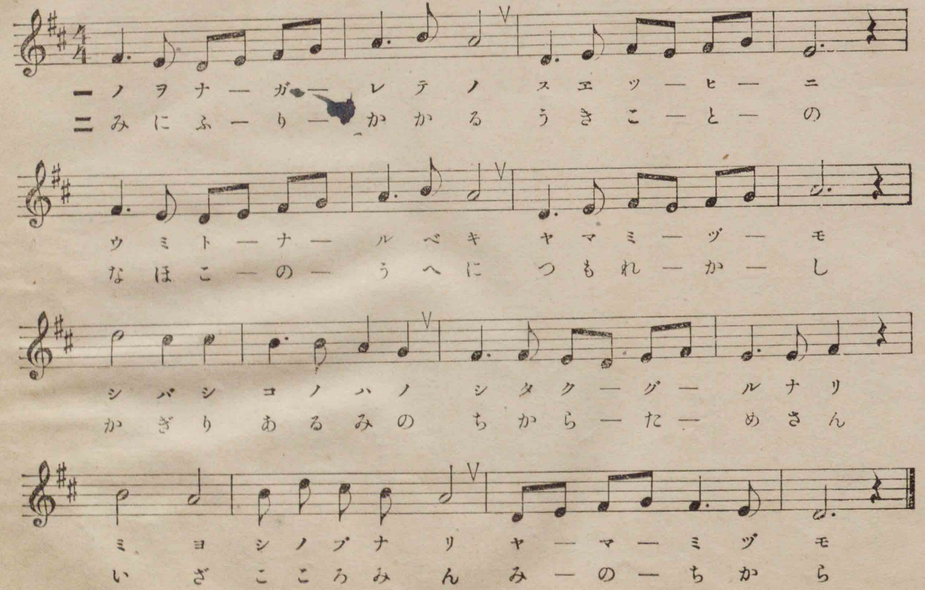
納　涼

♩=92



忍　耐

♩=84



八、忍　耐

一、野を流れての末遂に
海となるべき山水も、
しばし木の葉の下くぐるなり。
見よ、忍ぶなり、山水も。

二、身にふりかゝる憂き事の、
なほこの上に積れかし。
限ある身の力ためさん。
いざ試みん、身の力。

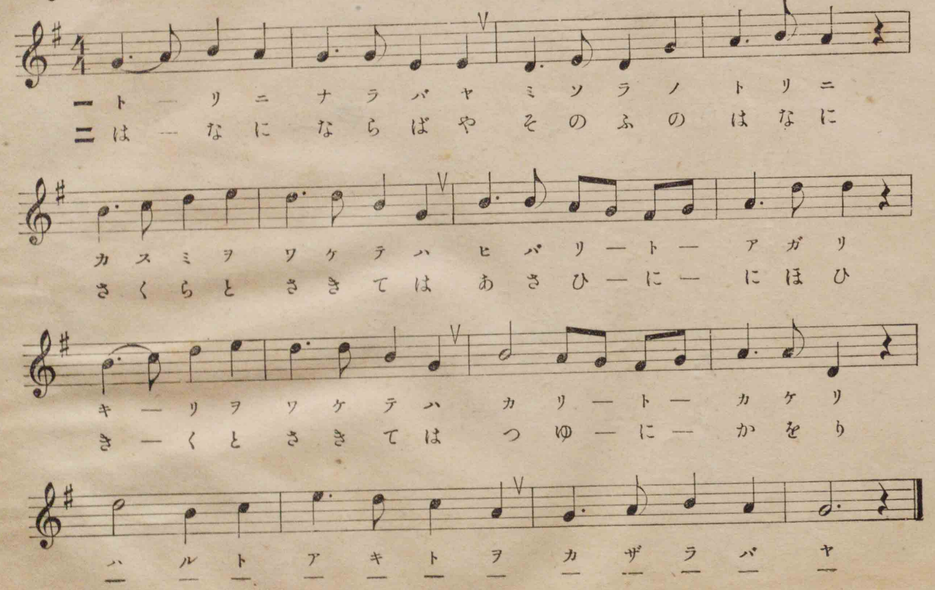
九、鳥と花

一、鳥にならばや、み空の鳥に。
　霞をわけては雲雀とあがり、
　霧をわけては雁とかけり、
　春と秋とをかざらばや。

二、花にならばや、園生の花に。
　櫻と咲きては朝日に匂ひ、
　菊と咲きては露にかをり、
　春と秋とを飾らばや。

鳥と花

♩=104



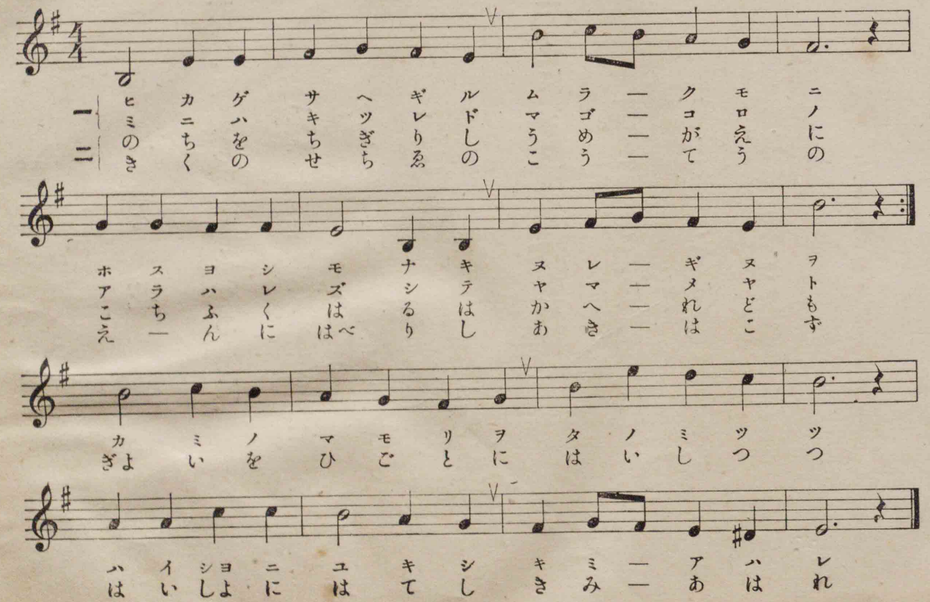
一〇、菅　公

一、日かげ遮るむら雲に、
　干すよしも無き濡衣を
身には著つれど、眞心の
　あらはれずして止まめやと、
神のまもりを憑みつゝ
　配所に行きし君あはれ。

二、のちを契りし梅が枝に、
　東風吹く春はかへれども、
菊の節會の後朝の
　宴に侍りし秋は來ず、
御衣を日毎に拜しつゝ、
　配所に果てし君あはれ。

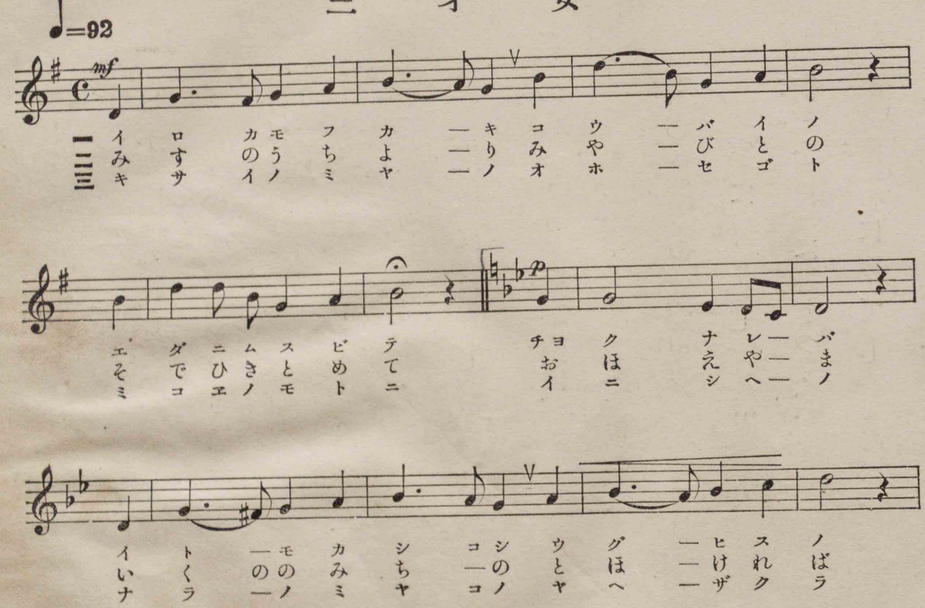
菅　公

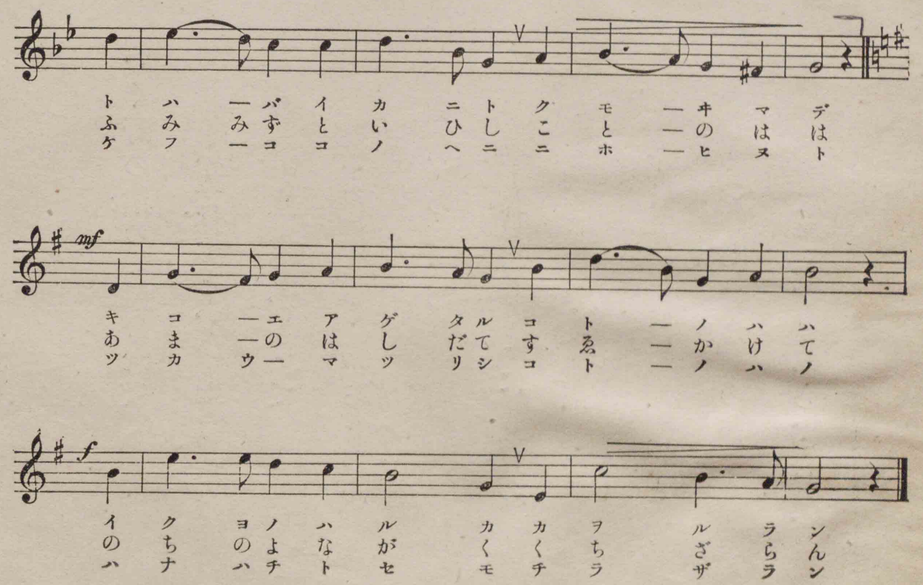
♩=80



三才女

♩=92


mf
ノのト
イとゴ
バびセ
ウやホ
コみオ
キりノ
カよヤ
フちミ
モうノ
カのイ
ロすサ
イみキ
一二三
バまノ
レやへ
ナえシ
クほニ
ヨおイ
チ
テてニ
ビめト
スとモ
ムきノ
ニひヱ
ダでコ
エそミ
ノばラ
スれク
ヒけザ
グほへ
ウとヤ
シのノ
コ
シちヤ
カみミ
モのノ
トくラ
イいナ


デはト
マはヌ
キのヒ
モとホ
クこニ
トしニ
ニひへ
カいノ
イとコ
バずコ
ハみフ
トふケ
mf
ハてノ
ハけハ
ノかノ
トゑト
コすコ
ルてシ
タだリ
ゲしツ
アはマ
エの一
コまカ
キあツ
f
ンんン
ラらラ
ルざザ
ヲちラ
カくチ
カくモ
ルがセ
ハなト
ノよチ
ヨのハ
クちナ
イのハ

一、三　才　女

一、色香も深き紅梅の
　枝にむすびて、勅なれば
いともかしこし、うぐひすの
　問はば如何にと、雲るまで
聞え上げたる言の葉は
　幾代の春か　薫るらん。

二、みすのうちより、宮人の
　袖引止めて、大江山
いく野の道の　遠ければ
　ふみ見ずといひし言の葉は
天の橋立　末かけて
　後の世永く朽ちざらん。

三、きさいの宮の仰言
　御聲のもとに　古の
奈良の都の　八重櫻
　今日九重に匂ひぬと
つかうまつりし　言の葉の
　花は千歳も散らざらん。

（尋常小學讀本卷九所載）

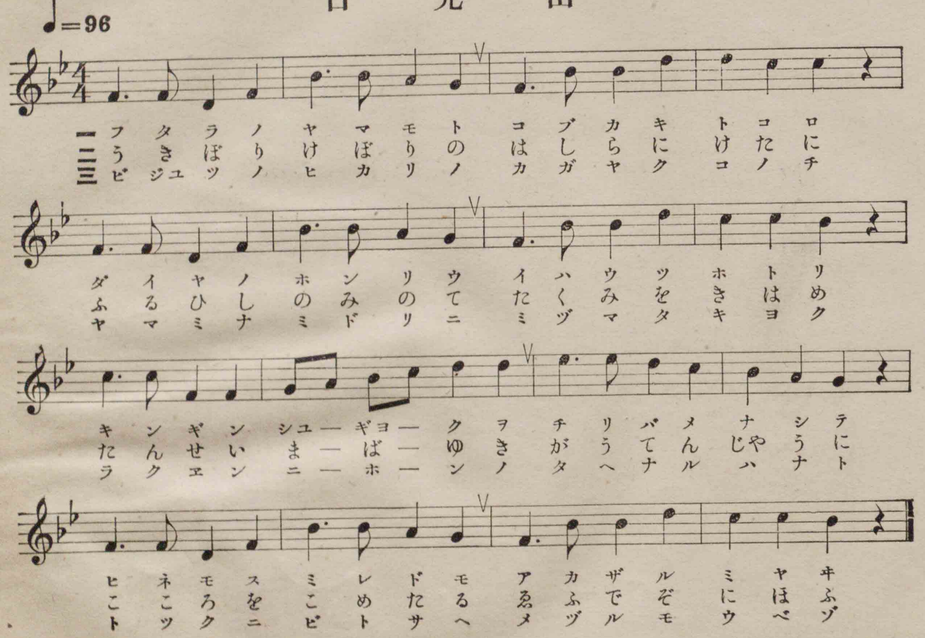
一三、日光山

一、二荒の山下　木深き所
大谷の奔流　岩打つ邊、
金銀珠玉を　鏤めなして、
終日見れども　厭かざる宮居。

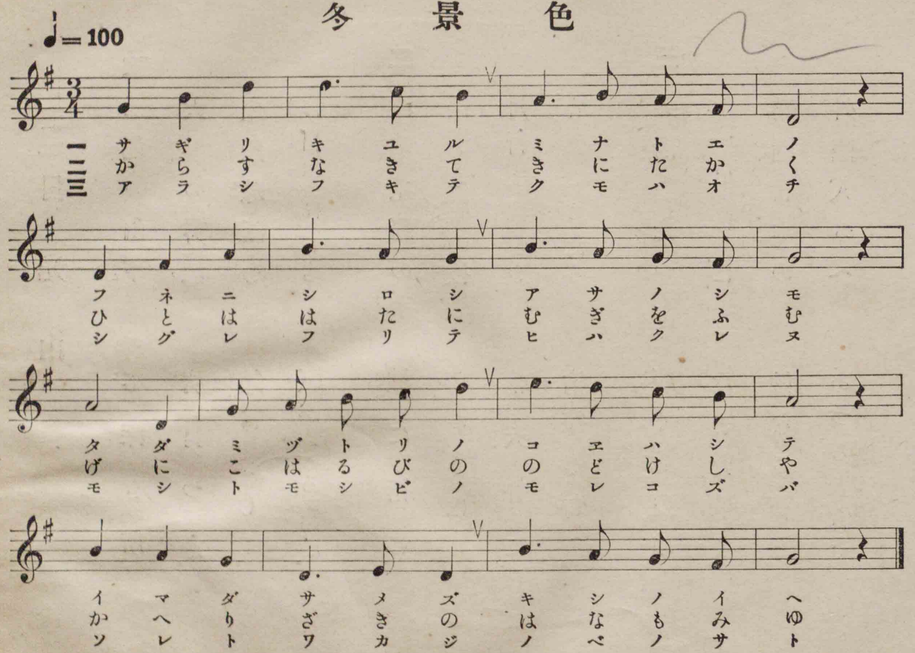
二、浮彫毛彫の　柱に桁に、
振ひし鑿の技　巧をきはめ、
丹青まばゆき　格天井に、
心をこめたる　繪筆ぞ匂ふ。

三、美術の光の　輝く此の地、
山皆綠に　水また清く、
樂園日本の　妙なる花と、
外國人さへ　めづるも宜ぞ。

日光山



冬景色



一三、冬景色

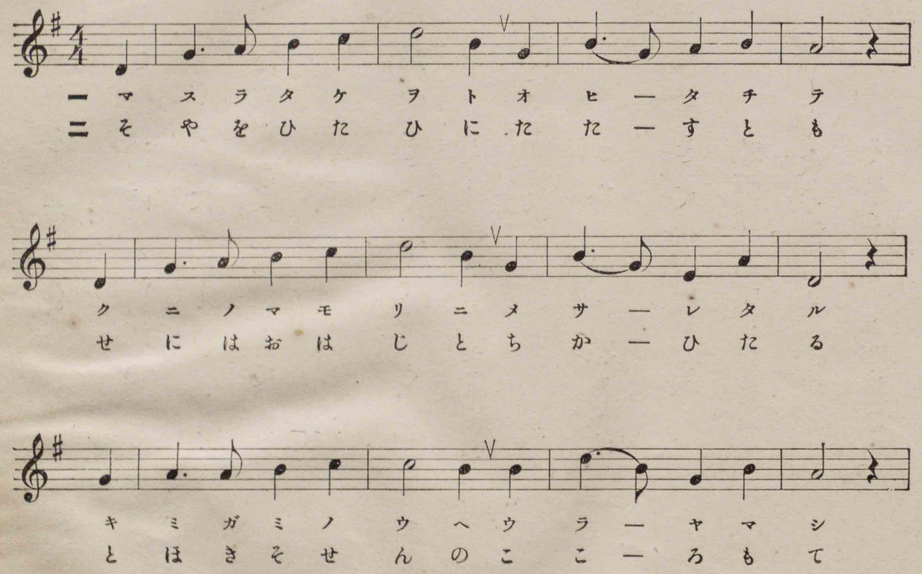
一、さ霧消ゆる湊江の
　舟に白し、朝の霜。
ただ水鳥の聲はして
　いまだ覺めず、岸の家。

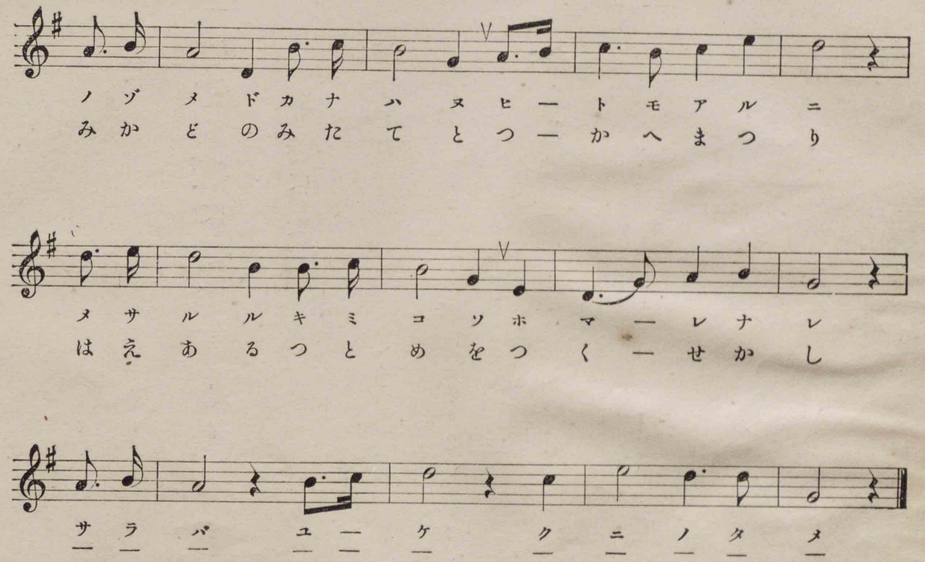
二、烏啼きて木に高く、
　人は畑に麥を踏む。
げに小春日ののどけしや。
　かへり咲の花も見ゆ。

三、嵐吹きて雲は落ち、
　時雨降りて日は暮れぬ。
若し燈火の漏れ來ずば、
　それと分かじ、野邊の里。

入營を送る

♩=108


一 マ ス ラ タ ケ ヲ ト オ ヒ ー タ チ テ
二 そ や を ひ た ひ に た た ー す と も
ク ニ ノ マ モ リ ニ メ サ ー レ タ ル
せ に は お は じ と ち か ー ひ た る
キ ミ ガ ミ ノ ウ ヘ ウ ラ ー ヤ マ シ
と ほ き そ せ ん の こ こ ー ろ も て


ノ ゾ メ ド カ ナ ハ ヌ ヒ ー ト モ ア ル ニ
み か ど の み た て と つ ー か へ ま つ り
メ サ ル ル キ ミ コ ソ ホ マ ー レ ナ レ
は え あ る つ と め を つ く ー せ か し
サ ラ バ ユ ー ケ ク ニ ノ タ メ

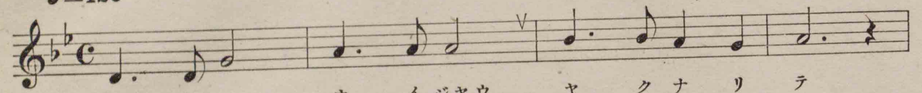
二、征矢を額に　立たすとも、
　背には負はじと　誓ひたる
遠き祖先の　心もて、
　みかどの御楯と　つかへまつり、
榮あるつとめを　盡せかし。
　さらば　ゆけ、國の爲。

一四、入營を送る

一、ますらたけをと　生ひ立ちて、
　國のまもりに　召されたる
君が身の上　うらやまし。
　望めどかなはぬ　人もあるに、
召さるゝ君こそ　譽なれ。
　さらば　ゆけ、國の爲。

水師營の會見

♩=120



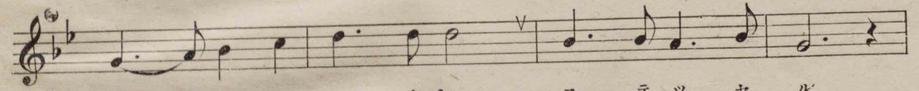
テきニもヌにテりニ
リのカとデれシあロ
ナめソのイぞニりゴ
クつゴふヒれモまン
ヤなオけイそトあネ

ウとハはテこゲにユ
ヤもシシるシ
イとウきダがルすク
カひヤてタわヒやア
シしア

ンにイのチのウ
タふりヤいト
ユはギのタたウうラ
ジ

ヨにノきカふヤこサ
リ

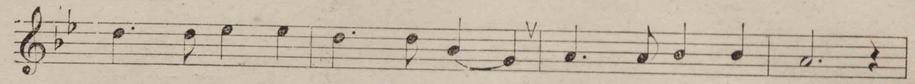
一二三四五六七八九



ルくノてニりリてリ
セるミけウベタひダ
ツじギとトこガがヒ
テちホちンろノたギ
スいオうセよモしミ

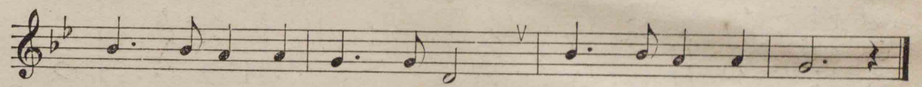
ンもキもをヌにヤ
グもばノるセてヤ
ウとカとンたキきク
ヤシあフこメえツおユ
ノんミるウ一一のテ
キわグたハをモんレ
ぐグたハをモんレ
一んメ一ノしよホ一カ
テだミかコしナぐワ

一二三四五六七八九



ノにバびルとリばニ
ンくレうツくアせイ
ケをフばヒぼバうダ
イんタのマんウやウ
ワクみツかタめヤゆリじハ
一る一つヒのルに一
トれリへナんスてシ
ウこノたシもイがエ
ヤシのトたウぶアわタ
イ一コは一一一一ト
タれミれヲぞニつオ
ギづホ一シれレじツ
ノくオわニこワたツ

一二三四五六七八九



イんルうトりシんタ
エぐツゆゾあべはハ
シうマぶニらズなミ
ヰやしシがカかンしノ
スにヤシわイちケやヒ
コるつみテへロへニりンはリ
ヅひミたコたネたテ
イあコたコこキいタ
ハ一シはノう一一キ
ロぞカれカやしノくメ
コまレ一クいフがラ
トいカかカたケなヒ

一二三四五六七八九

一五、水師營の會見

一、旅順開城約成りて、
　敵の將軍ステッセル
　　乃木大將と會見の
　　所はいづこ、水師營。

二、庭に一本棗の木、
　彈丸あともいちじるく
　くづれ殘れる民屋に
　今ぞ相見る、二將軍。

三、乃木大將は、おごそかに、
　御めぐみ深き大君の
　大みことのり傳ふれば、
　彼かしこみて謝しまつる。

四、昨日の敵は今日の友、
　語ることばも打ちとけて、
　我はたゝへつ、かの防備。
　　かれは稱へつ、我が武勇。

五、かたち正して言ひ出でぬ、
『此の方面の戰鬪に
　二子を失ひ給ひつる
　閣下の心如何にぞ』と。

六、『二人の我が子それ〴〵に
　死所を得たるを喜べり。
　これぞ武門の面目』と、
　　大將答へ力あり。

七、兩將晝食共にして、
　なほも盡きせぬ物語。
『我に愛する良馬あり。
　今日の記念に獻ずべし。』

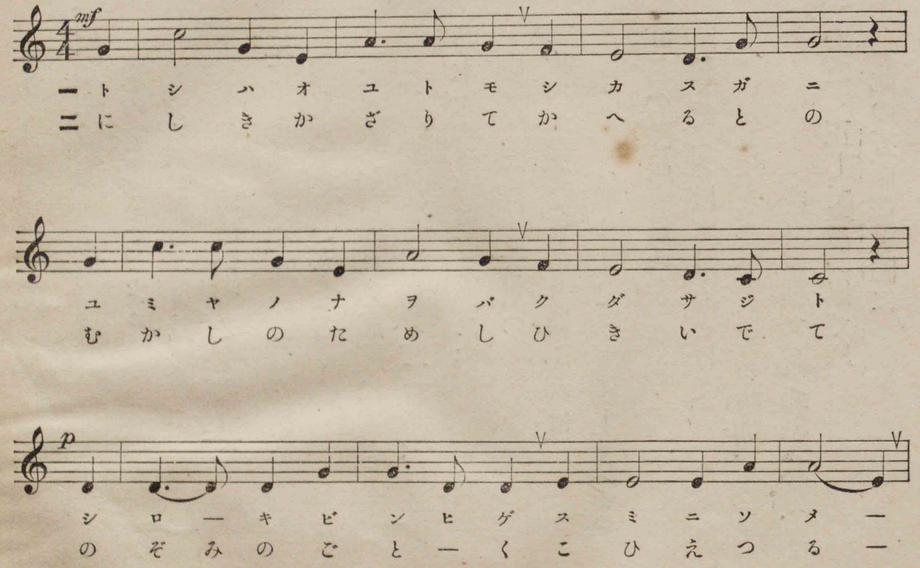
八、『厚意謝するに餘りあり。
　軍のおきてにしたがひて
　他日我が手に受領せば、
　　ながくいたはり養はん。』

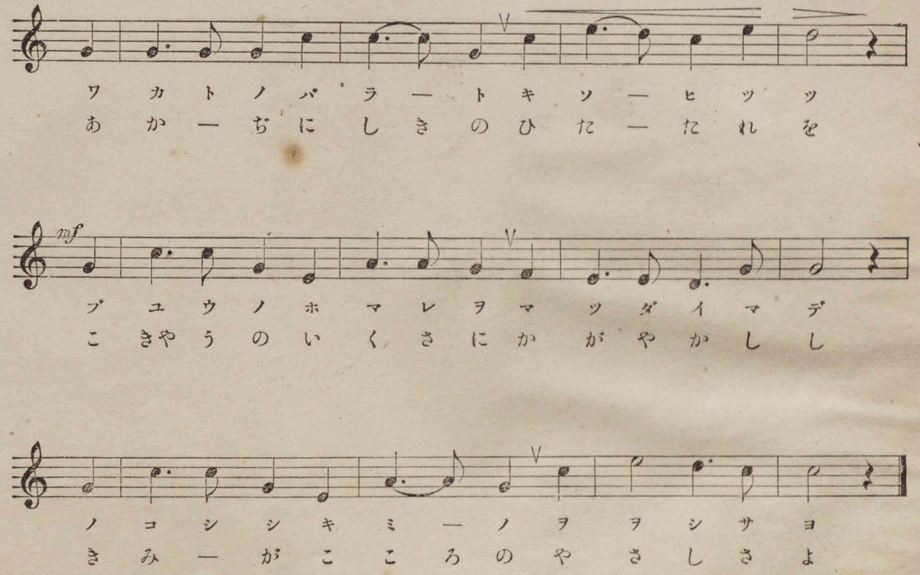
九、『さらば』と握手ねんごろに
　別れて行くや右左。
　砲音絶えし砲臺に
　　ひらめき立てり、日の御旗。

（尋常小學讀本卷十所載）

齋藤實盛

♩=92


mf
一トシハオユトモシカスガニ
二にしきかざりてかへるとの
ユミヤノナヲバクダサジト
むかしのためしひきいでて
p
シロ—キビンヒゲスミニソメー
のぞみのごと—くこひえつる—


ワカトノバラ—トキソ—ヒツツ
あか—ぢにしきのひた—たれを
mf
プユウノホマレヲマツダイマデ
こきやうのいくさにかがやかし
ノコシシキミ—ノヲヲシサヨ
きみ—がこころのやさしさよ

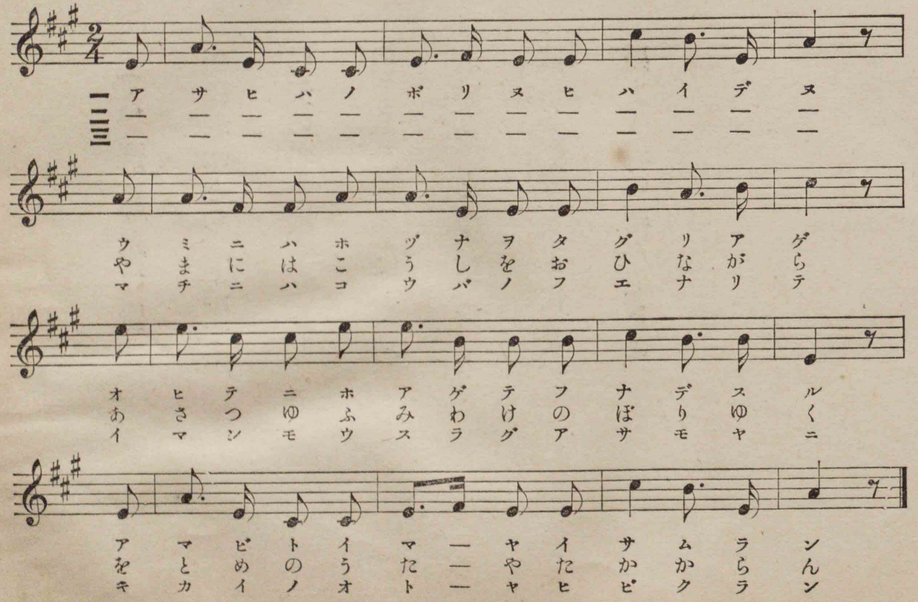
一六、齋藤實盛

一、年は老ゆとも、しかすがに
弓矢の名をばくださじと、
白き鬢鬚墨にそめ、
若殿原と競ひつゝ、
武勇の譽を末代まで
殘しゝ君の雄々しさよ。

二、錦かざりて歸るとの
昔の例ひき出でて、
望の如く乞ひ得つる
赤地錦の直垂を
故郷のいくさに輝しゝ
君が心のやさしさよ。

朝の歌

♩=69



一七、朝の歌

一、朝日は昇りぬ、日は出でぬ。
　海には、帆綱をたぐり上げ、
　追手に帆あげて船出する
　海士人今や勇むらん。

二、朝日は昇りぬ、日は出でぬ。
　山には、小牛を追ひながら、
　朝露踏分け登りゆく
　少女の歌や高からん。

三、朝日は昇りぬ、日は出でぬ。
　町には、工場の笛鳴りて、
　今しも薄らぐ朝靄に、
　機械の音や響くらん。

一八、大塔宮

一、氷の刃御腹に當てて、
經巻かづき、堅唾をのみて
忍びおはせし般若寺あはれ。

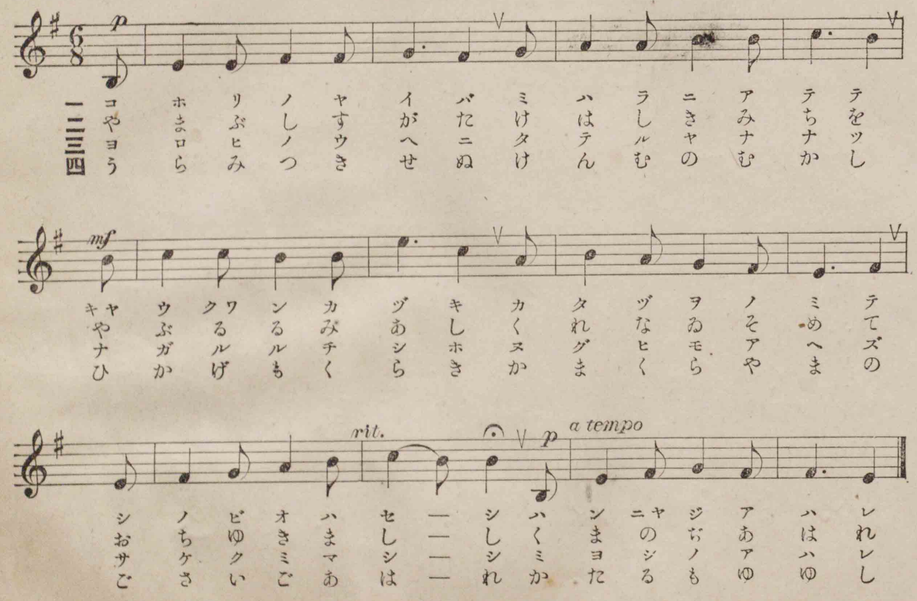
二、山伏姿、嶮しき道を、
破るゝ御足紅染めて
落行きましゝ熊野路あはれ。

三、鎧の上に立てる矢七つ、
流るゝ血しほ拭ひもあへず、
酒酌みましゝ三芳野あはれ。

四、恨盡きせぬ建武の昔、
日影も闇き鎌倉山の
御最期あはれ、語るもゆゝし。

大塔宮

♪=104



一九、卒業生を送る歌

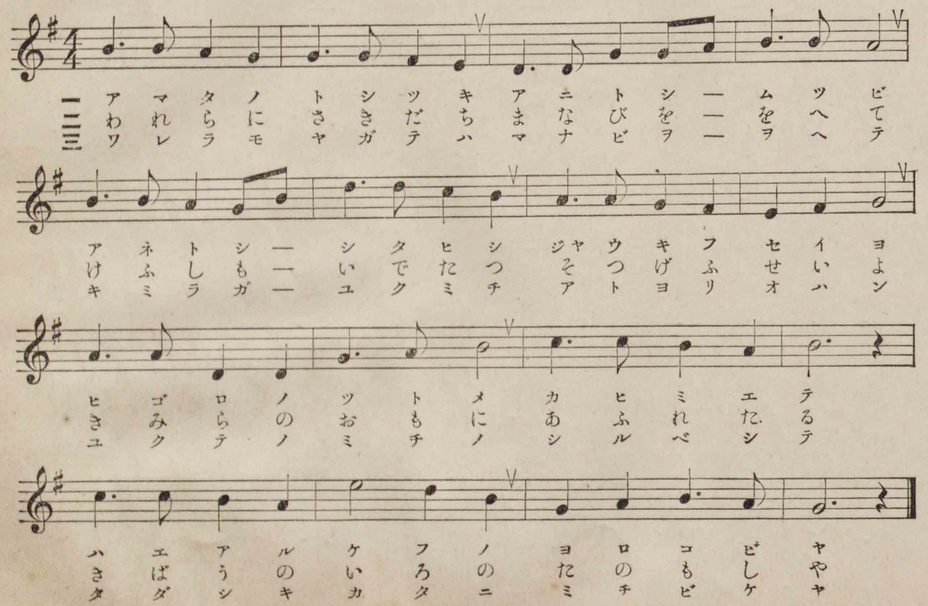
一、許多の年月兄とし睦び、
　姉とし慕ひし上級生よ。
　日頃のつとめ效見えて
　榮ある今日のよろこびや。

二、吾等に先だち學を卒へて、
　今日しも出立つ卒業生よ。
　君等の面にあふれたる
　希望の色のたのもしや。

三、吾等もやがては學を卒へて、
　君等が行く道後より追はん。
　ゆくての道のしるべして
　正しきかたに導けや。

卒業生を送る歌

♩=104



發行所　會社株式　國定教科書共同販賣所
東京市日本橋區新右衛門町十六番地

印刷所　博文館印刷所
東京市小石川區久堅町百〇八番地

製複不

印刷者　水谷景長
東京市小石川區久堅町百〇八番地

發行者　代表者　大橋新太郎
會社株式國定教科書共同販賣所
東京市日本橋區新右衛門町十六番地

著作權者　文部省

大正二年五月廿八日發行
大正二年五月廿五日印刷

定價金六錢
尋常小學唱歌第五學年用